

金子直吉と神戸高商出身者

鈴木商店はなぜ一時は「三井・三菱と天下を三分する」と豪語するほど短期間に巨大企業グループに発展することができたのか、「人材」の側面から考察する

■大番頭・金子直吉の特徴

(1)商いの上で大きな損失を出しながらも、主人・鈴木よねが金子の経営才覚と組織の統率力を見抜き「絶対的な」信頼を寄せる一方、金子も主人の信頼に応えて「絶対的な」忠誠を失わなかったこと。

(2)学歴はなかったものの努力による豊かな学識で日本の動向と世界の情勢を的確に把握、経営に活かす幅広い人脈を築いたこと。

(3)世界的な企業の発展には高い学歴を持つ人材の多面的な知識が必要だが、すぐそばに神戸高商があり、校長・水島鍬也が日本の将来のために貿易に携わる学生の教育をしていたこと。

(4)私利私欲に走らなかったことにより、社員の心をつかんだだけでなく、主家・鈴木家への忠義を社員にも求めていること。

■鈴木商店に多くの卒業生を送った神戸高商校長・水島鍬也の特徴

(1)日本が「富国」となって西洋列国と肩を並べるために、簿記・会計を中心とした近代的な商業教育と外国人居留地商人との商いのために複数の外国語講座を取り入れたこと

(2)水島は東京高商(現在・一橋大学)卒業後、教授をしており、東京高商の教授を神戸高商の教授に招き、東西の学問的な人材交流をはかったこと

(3)22年間の校長任期中、学生のために教育面だけでなく生活の面でも丁寧に面倒をみており、優れた教育者として社会人となった卒業生から心服を得ていたこと

(4)福沢諭吉と同じ大分県中津の出身で、福沢同様「独立自尊」の精神を神戸高商の学生に強く訴えている。明治期最大の政治目標である不平等条約の改正を学生たちに自覚させるためであろう。

■神戸高商出身の代表的な鈴木商店社員

●高畑誠一

神戸高商から鈴木商店にはじめて、明治42年入社。神戸高商時代に学んだ語学力を見込まれ大正元年(1912年)から大正15年までロンドンに駐在、三国間貿易などで鈴木商店を世界的企業に発展させた。ロンドン駐在時代川崎造船所の松方幸次郎が蒐集する美術品購入のための資金を世話して、松方コレクションに尽力

●永井幸太郎

神戸高商の同期・高畑の勧めで高畑より半年遅れで鈴木商店入社。海外商いの高畑に対して、永井は国内で鈴木商店の組織の近代化や商社として必要な情報収集や神戸高商で学んだ金融論を経営判断の材料に活かしている。おそらく鈴木商店の近代的な簿記・会計は永井が音頭をとったと推測される。第二次世界大戦後の昭和22年、吉田茂内閣の貿易庁長官に登用されると直ちに永井はアメリカに英語の「フランクリン自伝」を注文、丁寧な書き込みをしている。アメリカを中心とした占領下の戦後日本にあって、青春時代薫陶を受けた水島鏡也の教える「一国の独立」の魂を、政治の中枢に身を置いて、あらためて永井は自らに鼓吹したのであろう。

■企業と学校教育

(1)岡部孝好・著『神戸高商と神戸商大の会計学徒たち』(2017年 神戸新聞総合出版センター)は、世界を相手に企業活動するために、世界に通用する簿記・会計の制度を日本の高等教育に取り入れる歴史を紹介した優れた著作。

(2)商業教育は一見すると実務的な専門学校教育に見えるが、近代資本主義の枠組みを支える重要な学問であること。

(3)水島に見られる世界の情勢を洞察した教育内容と情愛に満ちた人間教育。

(4)鈴木商店と神戸高商との関係は、「学問とはなにか」「人間とはなにか」を考える契機を提示している。